

## 中国人児童による「てある」構造習得に関する予備的調査

久野美津子／白畑知彦

### 【要 旨】

本稿は、中国人児童1名の縦断的発話資料を基に、第二言語としての「てある」構造習得に関する予備的調査を行ったものである。まず、「てある」の出現時期および「て(い)る」との混乱について調査した。その結果、「てある」の出現時期は滞在7ヵ月目であり、「て(い)る」との混乱は滞在7～16ヵ月目に断続的に観察された。また、誤りとは断定できないが「てある」が適切だと思われる場面での「てる」の使用も8ヵ月目以降毎月観察されていた。次に、「ている」構造についても調査し「てある」構造との関わりを調査した。その結果、「て(い)る」は「てある」より出現時期が早く、早期から多用された。また、「てある」と「て(い)る」との混乱のうち「てある」を「て(い)る」とする傾向が見られた。このことから、「て(い)る」の方が認識されやすく、「状態を表す方法として『て(い)る』を用いる」という学習方略がとられていた可能性があると考えられる。

【キーワード】第二言語習得 中国人児童 結果状態 「てある」「ている」

### 1. はじめに

本稿は、自然な習得環境で第二言語(L2)として日本語を習得した中国人児童(L児)の「てある」構造習得に関する事例研究報告である。「てある」とは動詞のテ形に後続する補助動詞(二次的アスペクト)の一つである(寺村1984)<sup>①</sup>。そして、動作・行為・作用・変化などの結果状態(例:窓が開けてある)や、動作・行為などの効果・影響の有効性(例:チケットは予約してある)を表す(寺村1984、小泉他1989、原沢1998、市川2005)。

L2学習者にとって「てある」は習得困難な文法項目の一つであり、「ている」との混乱(例:\*窓が開けている)も見られる(水谷1985、野田他2001、市川2005)<sup>②</sup>。そして、その一因には「てある」が「ている」と一部共通の用法を持つ点などが指摘されている(市川2005)<sup>③</sup>。例えば「窓が開けてある」と「窓が開いている」はいずれも結果状態を表し、「花子を結婚式に招待してある」と「花子を結婚式に招待している」はいずれも経験・完了の状態を表す(原沢1998、松岡2000、市川2005)。このように、両者に共通点はあるものの、「てある」と「ている」の用法は微妙に異なり、日本語教育においては以前から問題になっている文法項目である(白川2002)。経験的にも、「てある」は教師にとって教えるのが容易ではない文法項目の一つであると思われる。しかし、これまで「ている」の習得研究は数多くされているのに対し(菅谷2003、2004)、「てある」の習得研究はほとんどされていない。先行文献に見られる例も、成人学習者の誤りを断片的に拾い集めたものが多く、同表現に焦点を当て詳細に習得過程を調査したものではない。そこで、本稿では「てある」構造の習得に焦点を当て、使用状況を明らかにしたい。そして、これまで指摘されている

ように「ている」との混乱は見られるのか、また、習得にはどのような特徴が見られるのかについて述べたい。学習者の習得の事例を把握しておくことは、教師にとっても重要であり、また、今後の「である」構造の習得過程を解明するための基礎研究になると思われる。

## 2. 先行研究

母語(L1)の先行研究では、「である」を用いた発話例が幾つか報告されている。例えば、「あ これ かいてあるぞ(2歳8ヵ月)」(永野1959)、「うさぎさんが かいて ある(1歳11ヵ月)」(横山1989)などである。しかし、これらはいずれも助詞習得に焦点を当てており、「である」の習得を調査目的としたものではないため、その考察はされていない。また、伊藤(1990)は接続文の習得過程として、接続助詞「て」を用いた構文(「～てあげる」「～てもらおう」「～ていく」「～てくる」など)について述べているが、伊藤の場合も「である」に関する記述は見当たらない。「である」の誤りの例は先行文献では報告されていないが、筆者達の収集した未発表の発話データからは、壁にあるパズルの絵を見て「\*絵が描いてる(1歳11ヵ月)」と発話した例や、閉まっている店を見て「\*あ、閉まっているじゃん(2歳7ヵ月)」とした例などが観察されている<sup>4)</sup>。このことから、L1の場合にも「である」習得は容易でないことが予想される。

次に、L2先行研究の場合、成人学習者には「である」と「ている」との混乱(\*窓が開いてある)がよく見られるという(市川2005)。また、水谷(1985)は英語と日本語とを比較し、英語をL1とする成人学習者には「である」という表現がなじみにくく、主格(例:鍵が)に他動詞(例:かける)が続くという形式も困難であると述べている。ただし、これらの文献はいずれも縦断的研究ではない。一方、松本(2001)は中国人児童1名(9歳4ヵ月～12歳1ヵ月)の作文と発話データから、動詞の形態素の出現時期や使用回数などを調査した。その調査には「である」に関する報告もあり、発話データの89週目に「である」が観察されている。発話データのうち、二次的アスペクトである「ている」「てしまう」「てくる」の出現時期はそれぞれ10週目、24週目、75週目であることから、「である」の出現時期は比較的遅かったことがうかがえる。しかし、「である」の発話例が記されていない点、89週目以降「である」が観察されていない点などから、松本(2001)の研究からも「である」構造の習得過程を察することは難しい。このように、L1同様L2先行研究でも、「である」に関する断片的な報告例はいくつかあるものの、同構造に焦点を当て、体系的に調査した習得研究はないと思われる。

## 3. 調査

### 3-1 データ収集方法

対象としたのは中国人男児(L児)である。10歳3ヵ月の時、両親と中国から来日し、静岡市に住むようになった。来日前の日本語学習歴は全くなかった。8月上旬に来日し、翌9月から市内の小学校へ通い始めた。滞在1ヶ月目にあたる8月は小学校が夏休みだったため、同級生や教師との交流はなかった。しかし、母親(中国語母語話者)が日本語に堪能だったため、この時期、家庭内で彼女から、日本語での挨拶表現や自己紹介など(例:

はじめまして。わたしは～と申します。)を習っていたようである。しかし、それ以外には、彼は教科書から明示的に文法を学ぶことはなかった。

本稿で分析するデータは、L児の滞在2～16ヵ月目の15ヵ月間の発話データである。これは観察者達が原則として1週間に1度、L児の通う小学校を訪問し、約2時間、自由会話を録音し、文字化したものに基づいている<sup>6)</sup>。この観察期間はL児が10歳4ヵ月～11歳6ヵ月の年齢の時期に相当する。

### 3-2 分析方法

調査項目は、「対象が+他動詞+てある」「対象を+他動詞+てある」などで表される「てある」構造である(小川・林他1982、原沢2002)<sup>6)</sup>。これらには、(a)「が」「を」など助詞が脱落しているもの(例:窓開けてある)、(b)「てある」と発話していないもの(例:\*本が置いている)、(c)「てある」が過剰般化しているもの(例:\*花が咲いてある)も含む<sup>7)</sup>。このうち、(a)では、「が」「を」は口語で省略されることがあるため(益岡・田窪1987)、適格構造とみなした。(b)では、例えば、紙に描かれた絵を見つけて「絵描いてる」と発話した場合、「絵が描いてある」を「\*絵描いてる」と誤った可能性が考えられる<sup>8)</sup>。しかし、「絵を描いて(い)る」と言おうとした可能性も全くないとは言えない。このように、誤りとは断定できないが、「てある」の方が適切だと思われる場面で「てる」を用いた場合、「\*」は付さずに「他動詞+てる」と分類した。

### 3-3 中国語での表現

中国語で「てある」に相当する意味を表すには、動詞に「着」「在」「有」「好」「了」などを付加する表現方法がある(倉石・折敷瀬1983、香坂1986、杉村1994、荒川2003)。このうち、「着」は「事物や人物が～という状態で存在している」という意味で、結果状態を表すのに用いられる<sup>9)</sup>。「着」と共に使用される動詞は、ある動作によって結果が残る動詞であり、自動詞も他動詞も同じように使うことができる(杉村1994)。(1)は動詞「放(置く)」を用いた例である。

#### (1) 椅子上放着一个帽子(椅子の上に帽子が置いてある)

この他、「有」は動作・行為の結果が存在していること、「好」は完了や申し分のない状態になる(する)こと、「了」は動作や変化の実現・完了を表す(香坂1986、杉村1994、荒川2003)。(2)は動詞「拍(撮る)」、(3)は動詞「托付(頼む)」を用いた例である<sup>10)</sup>。

#### (2) 我拍有照片呢(私は写真を撮ってある)

#### (3) 那事托付他好了(それは彼に頼んである)

ただし、これらは常に「てある」となるわけではなく、例えば「站(立つ)」「停(止まる)」と共に「着」を用いた場合は、「站着(立っている)」「停着(止まっている)」となり、「着」によって「てある」「ている」のいずれも表せるようである。

これらの言語事実から、中国語をL1とする学習者が「てある」を習得する際のL1転移の可能性について考えたい<sup>10)</sup>。L1では「着」を用いて結果状態を表す際、前接する動詞は自動詞でも他動詞でもよい。さらに、「着」は「ている」「てある」の2通りの形式で表現される。このことから、結果状態を表すには「自動詞/他動詞+ている/てある」という4通りの表現(例:窓が開いている、\*窓が開いてある、\*窓が開けている、窓が開けてある)が可能であり、どの表現が習得の初期段階で出現しても不思議ではない。つまり、「他動詞+てある」の出現時期や使用状況は、L1転移の影響によって左右されるものではないと考えられる。

#### 4 結果と考察

##### 4-1 観察結果

観察の結果を、滞在期間ごとに記したものが表1である。表中の数字は使用回数であり、同じ月に5回以上観察された場合は、使用回数の右側( )内に割合(%)を記した。適格構造では、7ヵ月目に「他動詞+てある」(例:書いてある)が初めて観察され、その後も毎月観察されるようになった。ただし、適格構造の使用の割合は毎月およそ40~70%であった。一方、不適格構造も7ヵ月目以降、断続的に観察されており、16ヵ月目まで適格構造と不適格構造とが混在していた。不適格構造には、「\*他動詞+てる」「\*他動詞+てい

表1 「てある」構造の使用状況

| 滞在期間<br>(年齢) | 適格構造            | 不適格構造           |                  |                |        | 他動詞<br>+<br>てる |
|--------------|-----------------|-----------------|------------------|----------------|--------|----------------|
|              | 他動詞<br>+<br>てある | *他動詞<br>+<br>てる | *他動詞<br>+<br>ている | *他動詞<br>+<br>て | *過剰使用  |                |
| 2 (10; 4)    | 0               | 0               | 0                | 0              | 0      | 0              |
| 3 (10; 5)    | 0               | 0               | 0                | 0              | 0      | 0              |
| 4 (10; 6)    | 0               | 0               | 0                | 0              | 0      | 0              |
| 5 (10; 7)    | 0               | 0               | 0                | 0              | 0      | 0              |
| 6 (10; 8)    | 0               | 0               | 0                | 0              | 0      | 0              |
| 7 (10; 9)    | 3 (50)          | 0               | 0                | 0              | 2 (20) | 0              |
| 8 (10; 10)   | 5 (71)          | 0               | 0                | 0              | 0      | 2 (29)         |
| 9 (10; 11)   | 2               | 0               | 0                | 0              | 0      | 1              |
| 10 (11; 0)   | 8 (62)          | 2 (15)          | 0                | 0              | 0      | 3 (23)         |
| 11 (11; 1)   | 4 (57)          | 1 (14)          | 0                | 1 (14)         | 0      | 1 (14)         |
| 12 (11; 2)   | 9 (60)          | 2 (13)          | 0                | 0              | 3 (20) | 1 (7)          |
| 13 (11; 3)   | 6 (50)          | 2 (17)          | 1 (8)            | 0              | 0      | 3 (25)         |
| 14 (11; 4)   | 3 (43)          | 1 (14)          | 0                | 0              | 0      | 3 (43)         |
| 15 (11; 5)   | 1               | 0               | 0                | 0              | 0      | 1              |
| 16 (11; 6)   | 11 (65)         | 1 (6)           | 0                | 0              | 0      | 5 (29)         |
| 合計           | 52 (59)         | 9 (10)          | 1 (1)            | 1 (1)          | 5 (6)  | 20 (23)        |

表2 「てある」構造で使用された動詞の種類

| 適格構造    | 不適格構造       |             |            |              | 他動詞+てる          |
|---------|-------------|-------------|------------|--------------|-----------------|
|         | 他動詞+<br>てある | *他動詞+<br>てる | *他動詞+<br>て | *他動詞+<br>ている |                 |
| 書く (42) | つける (6)     | 貼る (1)      | つける (1)    | 書く (2)       | 書く (9) 決める (2)  |
| 置く (5)  | 書く (1)      |             |            | 入る (1)       | 分ける (1) 撮る (1)  |
| やる (3)  | 閉める (1)     |             |            | つく (1)       | 並べる (1) つける (4) |
| 張る (1)  | 取る (1)      |             |            | 分かれる(1)      | 描く (1) 準備する(1)  |
| 描く (1)  |             |             |            |              |                 |

る」「\*他動詞+て」そして過剰使用があった。これらのうち、最も多かったのは「\*他動詞+てる」(例:\*字が書いてる)であり、不適格構造(16回)の半数以上(9回)を占めていた。過剰使用では、「\*自動詞+てある」(例:\*ついてある)が3回(7ヵ月目に2回と12ヵ月目に1回)あり、経験・記録を表す「ている」を「てある」としたもの(例:\*本を書いてある)が2回(12ヵ月目)あった。また、誤りとは断定できないが、「てある」の使用が適切だと思われる場面で「他動詞+てる」とした発話(例:本に日本人の名前書いてる)は、8ヵ月目以降毎月観察されていた。

「てある」構造で用いられた動詞の種類は表2に記した。表中( )の数字は使用回数を表す。これらの動詞のうち、「書く」は適格構造で初めて使用された動詞であり、「てある」構造全体の中で最も多く使用された動詞でもあった。「書く」の使用は、適格構造(42回)だけでなく、不適格構造(「\*他動詞+てる」1回、過剰使用2回)でも観察された。さらに、誤りとは断定できないが「てある」が適切だと思われる場面(「他動詞+てる」)でも9回観察されていた。一方、不適格構造で最も多く使用された動詞は「つける」(「\*他動詞+てる」6回、「\*他動詞+ている」1回)で、10~16ヵ月目にわたり断続的に観察されていた。

L児の発話例を以下に記す。例の右端( )内は滞在期間を表す。

(4) 適格構造「他動詞+てある」

- a. 先生 この中 リンて 書いてある。 (7ヵ月目)
- b. <観察者:(今から話すのは)何の話?最初に言ってみて)何かね それは中国 教科書の中で 書いてあるの話。 (7ヵ月目)
- c. <漫画本の中の漢字について)書いてあるよ 読み方。 (9ヵ月目)
- d. 先生は 中国辞典持ってる。学校で 置いてある。 (11ヵ月目)
- e. <雨の日のサーカスについて)テントみたいな張ってあるから 大丈夫なんだ。 (16ヵ月目)

(5) 不適格構造「\*他動詞+てる」

- a. \*夜寝る時 お父さんお母さん論文書くでしょ それで 電気がつけてるでしょ 明

- るくから 僕は自分の部屋の電気しめたけど。 (10ヵ月目)
- b. 〈辞書に祖母の書いた字を見つけて〉 \*1ページのとき あの おばあちゃんから  
字が書いてるよ。 (14ヵ月目)
- (6) 不適格構造 「\*他動詞+ている」  
\*後ろは小さいの部屋があって 部屋の前 あの 灯がつけている。 (13ヵ月目)
- (7) 不適格構造 「\*他動詞+て」  
〈テントの床の話〉 テントの下はね こうなってんのやつある。\*そいでその上は ちょっと、  
こういうのシールが貼って。だから 寒くない。 (11ヵ月目)
- (8) 不適格構造 過剰使用
- a. 〈観察者：カレーの中に入っていない、人参が?〉 \*入ってある。 (7ヵ月目)
- b. 〈観察者：キャラメルとかに(ベルマークが)ついてない?〉 \*いや 僕 家ね 時々  
鉛筆のそういうの ついてある ベルマーク。 (7ヵ月目)
- c. 高橋由美子? 〈観察者：ミスタードーナツの宣伝してる人。〉 \*漫画書いてある?  
違うか。 \*ランマという本書いてある? 〈R：それは高橋留美子。〉 (12ヵ月目)
- (9) 「他動詞+てる」
- a. 〈観察者：(日本の本だと) 何でわかった?〉 だって なんか 本のここに書いて  
る。日本のにって書いて かつこ そして鳥山明って名前書いてある。 (9ヵ月目)
- b. 〈ずぼん売り場の陳列の仕方について〉 こうやってね並べてるの。一番小さいのから  
大きいまで。 (16ヵ月目)
- c. パンがね 番号 書いてあるんだよ。こっちはね子供 それでこっちは大人 それ  
でね番号書いてるんだよ。 (16ヵ月目)

#### 4-2 「ている」表現との関わり

L児の「てある」構造習得では、「てある」を「てる」とする誤り(例：\*電気がつけてる)や、「ている」を「てある」とする誤り(例：\*ベルマークついてある)などが観察された。「てる」という形は「ている」の口語表現であることから(例：窓が開いてる)(富阪1997)、L児の「ている」構造についても調査し、「てある」の使用状況と比べることにした。まず、(10)には「ている」構造の習得の特徴と発話例を記した<sup>10)</sup>。このうち、(10 e)は、「てある」の不適格構造「\*他動詞+てる」で用いられた動詞「つける」「閉める」についての使用状況、および、「つける」「閉める」に対応する自動詞「つく」「閉まる」についての使用状況を記したものである。例中(→)内は本来発話されるべき表現を表す。

#### (10) 「ている」構造習得の特徴

- a. 観察を開始した滞在2ヵ月目に、結果状態および進行の用法で「てる」が出現した。  
例：窓 開いてる。 (2ヵ月目)

例：読んでる。 (2ヵ月目)

b. 滞在9ヵ月目頃から「てる」だけではなく「ている」も観察されるようになった。

例：お茶は 飲んでる。 (4ヵ月目)

例：最近走ってる 2キロ。 (7ヵ月目)

例：みんなが もう 黙っているかもしれないよ。 (9ヵ月目)

c. 「て(い)る」の使用回数は多かった(例えば4～7ヵ月目はそれぞれ39回、40回、41回、55回)。

d. 「てある」との混乱を除けば、テ形の誤り、「～る/た」との混同、「～て」という誤りなどが観察されたが、これらの誤りの回数は比較的少なかった(例えば4～7ヵ月目の間に6回)。

例：〈観察者：これは何してる?〉\*ご飯食べて(→食べてる)。 (4ヵ月目)

例：\*あの先生とイナブ先生 なんかつと似た(→似ている)よ。 (8ヵ月目)

e. 「閉まる」「つく」を用いた発話は、それぞれ2ヵ月目、7ヵ月目以降に観察された。また、「つける」を用いた発話は、11ヵ月目以降に観察された。「閉める」を用いた発話は観察されていなかった。

例：〈戸〉 閉まってる。 (2ヵ月目)

例：〈換気扇〉 ついてる。 (7ヵ月目)

例：先生が こうやって 何かつけてる。 (11ヵ月目)

以上の特徴を踏まえ、「ている」構造習得と「てある」構造習得との関わりについて検討する。第一に、出現時期について、「ている」構造では、結果状態を表す「てる」(例：窓開いてる)が2ヵ月目に出現したのに対し、「てある」構造では7ヵ月目に「てある」(例：書いてある)が出現した。これらはいずれも結果状態を表す用法であるが、出現時期は「てる」の方が「てある」より5ヵ月早かったことになる。出現時期の違いは、L1転移の影響によるとは考えにくいことから、L1児にとって「てる」の方が認識しやすかったことがうかがえる。

第二に、使用状況であるが、「ている」構造での「て(い)る」の発話回数は多く、結果状態を表す用法も早期(2ヵ月目)から観察されていた。そして、(10 e)の動詞「閉まる/閉める」「つく/つける」に関しては、「ている」構造での状態表現(「閉まってる」2ヵ月目、「ついてる」7ヵ月目)の方が、「てある」構造での状態表現(「\*戸が閉めてる」11ヵ月目、「\*電気がつけてる」10ヵ月目)よりも早く観察されていた。また、「て(い)る」と「てある」との混乱という点では、「て(い)る」を「てある」とする誤り(例：\*入ってある)に比べ、「てある」を「て(い)る」とする誤り(例：\*電気がつけてる)の方が多かった。つまり、「てある」と「て(い)る」との使用状況を比較した場合、「て(い)る」

の方が早期から多用され、「てある」構造でも「て(い)る」が使用される傾向が見られた。これらのことから、L児は、「状態を表す方法として『て(い)る』を用いる」という学習方略をとっていた可能性も考えられる。この一因には、「て(い)る」には結果状態だけでなく広い意味で「過去と結び付けられた現在の状態」(寺村1984)を表す用法がある点、使用頻度が高い点、そして「て(い)る」の用法には「てある」の用法と重なる部分がある点などが考えられる。

## 5. おわりに

L児の「てある」構造を調査した結果、滞在7ヵ月目から適格構造および不適格構造が観察され始め、これらは7～16ヵ月目にわたって混在していた。不適格構造には「\*他動詞+てる」「\*他動詞+ている」「\*他動詞+て」や過剰使用があり、このうち「\*他動詞+てる」が最も多かった。また、誤りとは言えないが、「てある」の使用が適切だと思われる場面で「てる」を用いた発話も、8～16ヵ月目に毎月観察されていた。L児の「ている」構造での「て(い)る」の使用状況についても調査し、「てある」構造の場合と比較した結果、出現時期は「て(い)る」の方が早く、発話回数も「て(い)る」の方が多かった。そして、「て(い)る」と「てある」との混乱という点から見れば、「て(い)る」を「てある」とする誤りは少なかったのに対し、「てある」を「て(い)る」とする誤りは多かった。このような誤りの一因として、「て(い)る」には広い意味で状態を表す用法がある点、「て(い)る」の用法が「てある」の用法と一部重なっている点などが考えられる。そして、状態表現で「て(い)る」「てある」のどちらを使用すべきか迷った場合などは、学習方略として「て(い)る」を用いるのではないかと思われる。

本稿は「てある」構造習得に関する一事例ではあるが、これまで体系的には明らかでなかった「てある」の使用状況や習得過程の特徴を示すことができたと思われる。本調査の結果を先行文献と比較すると、L1の場合には、動詞「書く」が用いられていた点で、L2の場合には、「てある」の出現時期が「て(い)る」より遅かった点や、「て(い)る」と「てある」との混乱が観察された点などで共通していた。また、L1先行文献には誤りの報告はなかったが、筆者達の収集した未発表のL1データには誤りも観察されており、「てある」を「てる」と誤る点や、「てある」を自動詞にも当てはめる過剰使用などが観察された点で、L児の場合と共通していた。このことから、L1、L2にかかわらず、「てある」構造の習得過程では類似した困難な点があることも予想される。今後、L1、L2ともに事例調査を重ね、「てある」構造の習得についてさらに解明していく必要があると思われる。

## 注

- (1) 寺村(1984)では「二次的アスペクト」は3つに分類されており、「てある」と同グループに分類されているものには「ている」「てしまう」「ていく」「てくる」がある。
- (2) 当該文脈での不適格な表現には「\*」を付す。
- (3) 「ている」の用法には進行(例:雨が降っている)、結果状態(例:窓が開いている)、完了(例:この機械をもう使っている)、経験・記録(例:山に2回登っている)、習慣(例:毎朝走っている)、反復(例:よくここに来ている)などがある(小川・林1982、

寺村 1984、市川 2005)。

- (4) 発話例の中の〈 〉には、発話時の状況や他者の発話などを記した。以下の例文でも同様である。また「\*絵が描いてる」は「(誰かが) 絵を描いている」の「を」を「が」と誤った可能性もないとは言えないが、ここでは詳しく分析せず発話例のみを記した。
- (5) 本発話データ収集では、野呂幾久子氏にも大変お世話になった。
- (6) 「てある」には自動詞を用いた表現(例:十分寝てある)もあるが(小川・林 1982)、L1児からは観察されなかった。また、否定表現(例:開けてない)は対象外とした。
- (7) 動詞が自動詞・他動詞の対を持ち(例:開く/開ける)、「\*窓が開けている」のように発話した場合、「窓が(開いている/開けてある)」という2通りの解釈が考えられる。文脈上、いずれの解釈も可能な場合には、便宜上「窓が開けてある」と解釈した。ただし、自動詞と他動詞に関する習得については、今後の研究課題としたい。
- (8) 『新版日本語教育事典』(2005)によれば、「てある」(例:こんな所にかばんが置いてある)の用法として、「動作の結果の発見」があげられている。
- (9) 既知の物についてその所在を詳しく述べる場合には「在」を用い、「帽子放在椅子上了(帽子は椅子の上に置いてある)」のようになる(杉村 1994、荒川 2003)。
- (10) 例(2)の「呢」は、ある動作の結果、その状態がそのまま存続していることを表す(香坂 1986、荒川 2003)。
- (11) Schwartz & Sprouse (1996) などの唱える、L2習得はL1の最終状態から開始されるとする完全転移モデル(Full Transfer Model)を前提とする。
- (12) 「ている」の用法の区分は定義の仕方が一様でない(寺村 1984)ため、ここでは全ての用法について記した。否定表現(例:開いていない)は除外した。

#### 参考文献

- (1) 荒川清秀(2003)『一歩進んだ中国語文法』大修館書店
- (2) 原沢伊都夫(1998)「テアル形の意味—テイル形との関係において—」『日本語教育』98号 pp.13-24
- (3) 原沢伊都夫(2002)「理論と実践の結びつき—テアルの表現形式から—」『静岡大学留学生センター紀要』第1号 静岡大学留学生センター pp.23-37
- (4) 市川保子(2005)『初級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク
- (5) 伊藤克敏(1990)『こどものことば 習得と創造』勁草書房
- (6) 小泉保・船城道雄・本田晶治・仁田義雄・塚本秀樹(編)(1989)『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店
- (7) 香坂順一(1986)『簡約現代中国語辞典』光生館
- (8) 倉石武四郎・折敷瀬興(編)(1983)『岩波日中辞典』岩波書店
- (9) 益岡隆志・田窪行則(1987)『セルフ・マスターシリーズ3格助詞』くろしお出版
- (10) 松本恭子(2001)「ある中国人児童来日3年間の動詞形態素使用の実態—発話と作文の縦断的調査記録:日本人児童や他の外国人児童との比較—」『2001年日本語教育学会春季大会予稿集』pp.200-206
- (11) 松岡弘(2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネット

ワーク

- (12) 水谷信子 (1985) 『日英比較 話し言葉の文法』くろしお出版
- (13) 永野賢 (1959) 「幼児の言語発達について—主として助詞の習得過程を中心に—」『ことばの研究』国立国語研究所 pp.383 - 396
- (14) 日本語教育学会 (編) (2005) 『新版日本語教育事典』大修館書店
- (15) 小川芳男・林大 (編) (1982) 『日本語教育事典』大修館書店
- (16) 大久保愛 (1967) 『幼児言語の発達』東京堂出版
- (17) Schwartz, B. D. & Sprouse R. (1996) L2cognitive states and the Full Transfer / Full Access model. *Second Language Research*, 12, 40-72
- (18) 白川博之 (2002) 「外国人のための実用日本語文法」『月刊言語』Vol.31 No.4 大修館書店 pp.54 - 59
- (19) 杉村博文 (1994) 『中国語文法教室』大修館書店
- (20) 菅谷奈津恵 (2003) 「日本語学習者のアスペクト習得に関する縦断的研究—『動作の継続』と『結果の状態』のテイルを中心に—」『日本語教育』119号 pp.65-74
- (21) 菅谷奈津恵 (2004) 「文法テストによる日本語学習者のアスペクト習得研究—L1の役割の検討—」『日本語教育』123号 pp.56 - 65
- (22) 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版
- (23) 富阪容子 (1997) 『なめらか日本語会話』アルク
- (24) 横山正幸 (1989) 「幼児による助詞の誤用の出現時期と類型」『福岡教育大学紀要』第38号 第4分冊 pp.225 - 236

A preliminary investigation of the acquisition of the *tearu* structure  
by a young Chinese child

HISANO, Mitsuko  
SHIRAHATA, Tomohiko

This paper is a preliminary investigation of the acquisition of the *tearu* structure (which indicates the state of the result of an action intentionally done by somebody) by a second language learner. It is based on data obtained from the spontaneous Japanese speech of a Chinese child, observed over a period of 15 months.

The results show that *tearu* appeared in the 7th month of the subject's stay in Japan, and confusion between *tearu* and *te(i)ru* (which expresses the state of the result of an action, continuing action, careers or experience, habit and so on) was observed from the 7th month until the 16th month intermittently. Furthermore, the use of *teru* was often observed in situations where the use of *tearu* is more appropriate although the use of *teru* is not a mistake.

In order to make clear the relation between the use of *tearu* and the use of *te(i)ru*,

the *teiru* structure was also investigated. The results show that *te(i)ru* appeared earlier than *tearu*, and *te(i)ru* was largely used appropriately. Furthermore, the subject showed a tendency to use *te(i)ru* in place of the *tearu* structure. It might therefore be concluded that it is easier for the subject to recognize *te(i)ru*, and overuse of *te(i)ru* is a learning strategy implemented to compensate for this limitation.